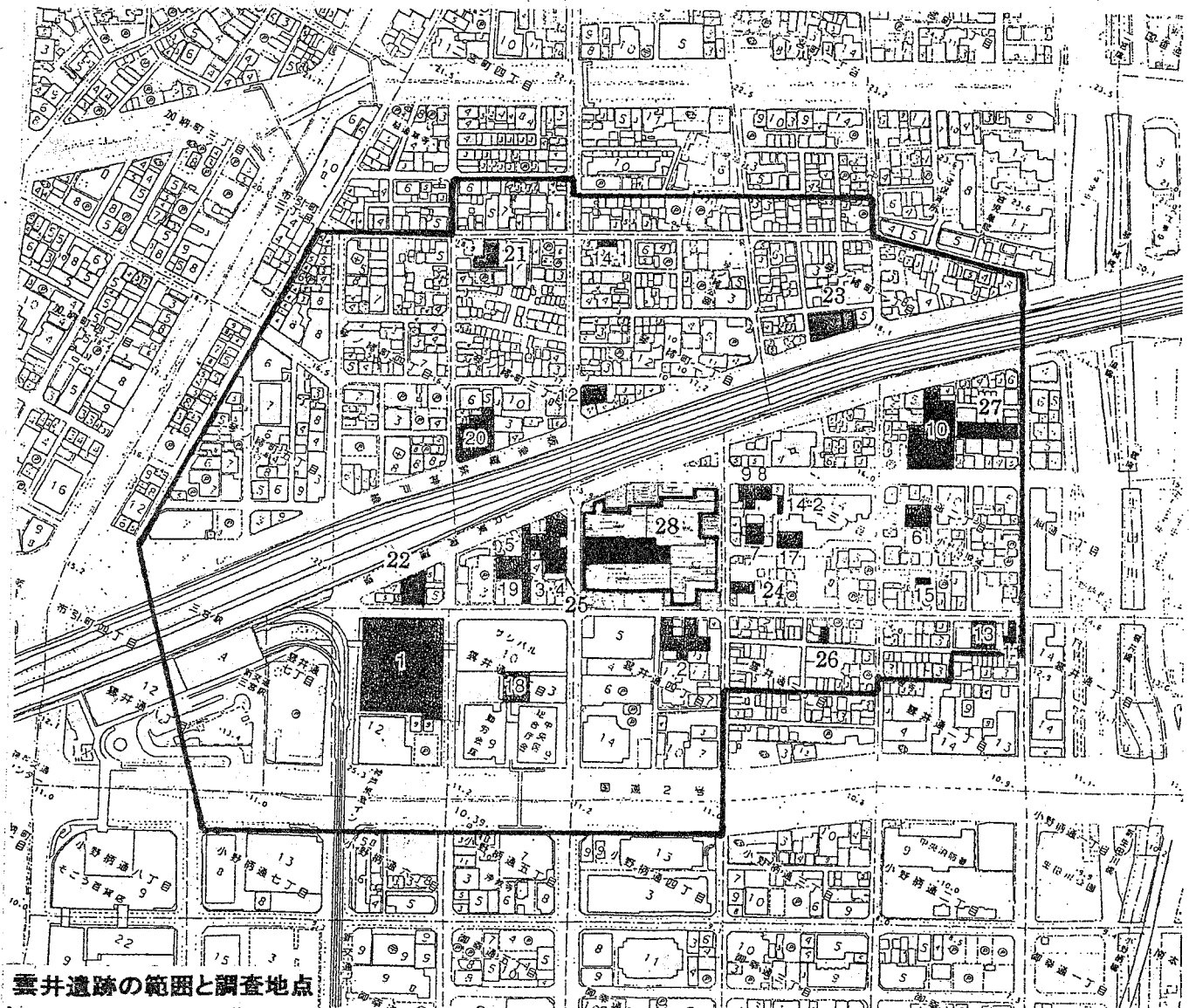


雲井遺跡第28次発掘調査 現地説明会資料

雲井遺跡は、昭和62年に市街地再開発事業に伴い発見された遺跡です。大小さまざまな調査を重ね今回の調査が28回目になります。

雲井遺跡は、東西約700m、南北約500mの範囲（約25万㎡）にJR・阪急線を中央に挟み広がる遺跡です。六甲山から流れる生田川により形成された扇状地扇端部に位置し、縄文時代から中世に及ぶ複合遺跡です。これまでの調査で、縄文時代では早期から晩期の遺構や遺物が発見されました。近畿地方では縄文時代の良好な遺跡が少ない中、平野部での当時の人々の生活を知る貴重な資料を提供しています。弥生時代では前期・中期の遺構や遺物が確認されています。特に弥生時代中期後半の方形周溝墓群が検出され、三ノ宮駅前での発見であることもあり、一躍脚光を浴びる遺跡となりました。



今回の調査は、旭通4丁目市街地再開発事業に伴い実施されるものです。事業地は範囲が広範であるため、複数回に分けて発掘調査を実施していきます。現在対象としている調査面積は、約6,500㎡ありますが、今回はその内の1区として約1,220㎡を調査しています。

調査地のいたる所で、焼けた瓦礫の層とその瓦礫が埋まった穴が最初見つかりました。これらの穴には、地面を削って造った階段が取り付けられており、中から昭和のビンや茶碗などが出土することから第2次世界大戦の防空壕と神戸大空襲で焼けた瓦礫と考えられます。他に調査地内には焼夷弾が地中に突き刺さった状態のものもあります。

第1遺構面では、調査地の西端で、鎌倉時代の南北方向の流路（水が流れた痕）が発見されています。この流路の中からは、弥生時代の土器、サヌカイト（石器を作る石）、飛鳥時代から鎌倉時代までの土器が出土しています。おそらく、この調査地の北側にも弥生時代、飛鳥時代から鎌倉時代にかけての遺跡がひろがっているものと考えられます。

第2遺構面では、奈良時代から平安時代にかけての畑跡が見つっています。

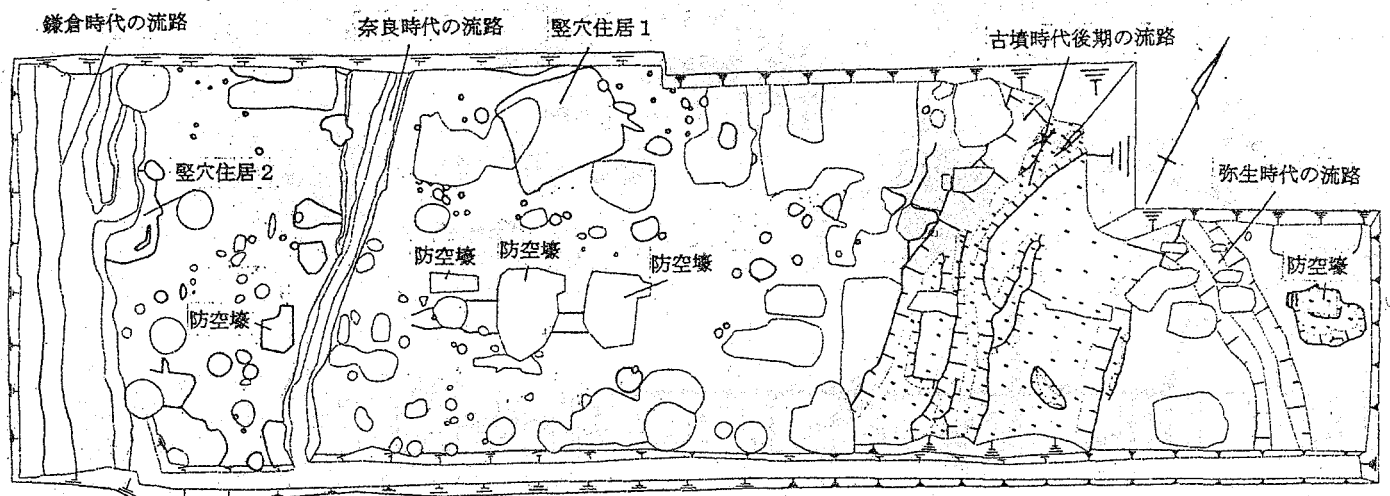
第3遺構面では、弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が見つかりました。中でも古墳時代前期の竪穴住居址2棟が発見されたのは注目されます。調査地の中央北側では、古墳時代前期の方形の竪穴住居址が良好な状態で発見されました。この竪穴住居址の規模は、1辺約4.6mを測り、支柱穴が4本見つかりました。南辺の中央には遺物が捨てられた状態で埋まった土坑が1基見つかりました。もう1棟の竪穴住居址は、第1遺構面の流路に削られた方形の竪穴住居です。規模は、1辺約3.8mを測ります。

また、調査地中央東寄りには、南北方向に流れた大きな流路が発見されています。この大きな流路からも縄文時代から古墳時代後期までの遺物が出土しましたが、弥生時代の遺物が比較的多く出土しています。

◆今回の調査成果◆

古墳時代前期の竪穴住居址2棟が今回の調査で確認されました。雲井遺跡を特徴づける弥生時代の周溝墓などの墓域としては未確認ですが、古墳時代前期には集落として当地域が利用されていたことが伺えます。

さらに今回の遺構面の下層には、弥生時代前期以降の遺跡が存在することが判明しており、今後引き続き調査を行なう予定です。



第3遺構面(弥生時代中期～古墳時代前期)平面図